

アイリスの剣

登場人物
紹介

ブルーデンス
(ブルース)の家族 ▶

リユーノ(父)

ティルディア(母)

バーネス(弟)

ユージン▲

角狼隊隊長。ゴーシャとは
女王と下僕のような歪んだ
関係。

ゴーシャ▲

フォーサイスの従妹で、
彼を盲目的に慕っている。

ヒラルダ▲

宮廷医。漆国アイリス唯一の一
級魔術師。道化師のような奇抜な
服装と化粧をしている。

フォーサイス▲

アイリス騎士団所属・雷龍隊
隊長。「アイリスの剣」の字を持
つ、ダグリード侯爵家の現当主。

ブルース▲

アイリス騎士団所属・雷龍隊副
隊長。性別を偽り、騎士を務める。
フォーサイスの頼れる右腕。

ブルーデンス▲

ブルースの女性に戻った姿。元
上官であるフォーサイスのもとへ、
素性を隠して嫁ぐことに。

目次

プロローグ

第一章 存在価値

第二章 過去と密約

第三章 舞踏会に巣食う闇

第四章 極彩色の魔術師

198 124 75 14 6

プロローグ

「ふざけるのも大概にしろつ……今さら女に戻れるか！」

極端なほどの音量で拒絕を告げたのは、ブルース・フカツシャー……フカツシャー公爵家現当主にして、漆国アイリスが騎士団所属・雷龍隊副隊長だった。

彼は度を越えた驚愕きょうがくを示し蒼褪あおざめ、立ち尽くす。

性質の悪い冗談だ。

到底、正気の沙汰とは思えない。

見開かれた闇色の双眸そらぼうに浮かんでは消える感情、それは徐々に激しい怒氣どきに集約されていく。

「拒否権などありません。貴方には、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ花嫁として嫁いでもらいます」

我が子を冷やかに見つめながら、実母テイルディア・フカツシャーは、翻ることのない決定事項

を、再びその舌に乗せた。

* * *

その数刻前。

まるで魔窟まくつに踏み込む剣士のような強張った面持ちで、ブルースは母の私室の扉の前にしばし佇んでいた。

母の前に立つときはいつも何ともいえない緊張が全身に走る。母のガラス球のような双眸そらぼうは彼女の心内を綺麗に隠しているというのに、こちらの心情は残らず見透かされている錯覚……否、それが錯覚だったことは一度としてないのだが。

正真正銘の実母ながら、愛情よりまず先に浮かんでくるのは、母の前では虚言きよごんも失敗も許されないという強迫観念。物心ついた頃から、その想いは心の奥底で肥大していくばかりだ。

それでも、此度の呼び出しは特別……ブルースに入室を躊躇させる原因は、母の懷妊かいにんにあった。

六ヶ月前にその報を受けたときの驚愕きょうがくは、今でもありありと思い出せる。それと同時に、斯くも母親の執念とは強いものか、と恐怖さえ覚えた。血を分けた弟、もしくは妹が生まれてくることを喜ばない者はいない……無論、自分もその中に含まれる。けれど、ただ単純にこの吉報を喜んでは

いられない我が身が呪わしい。

五年前までは弟の誕生を切望していたが、今は妹であつてくれないかという想いを打ち消すことができない。否応なしに押しつけられた人生は、ある人物に出会つて確かに色を持つようになつていたのだから。

昨日、母の主治医が往診に来ていた……そろそろ、男女の区別がつく頃だという。屋敷の使用人達は、この世で最大の不幸を背負つた者を見るような同情の視線をブルースに送つてきていた。

「いつまでそこに立つてゐるつもりです、お入りなさい」

母の私室の中からかけられた声に、ため息を呑み込もうとしていた喉がしめ上げられる。
「お待たせして申し訳ありません、……母上」

心も整わぬまま、急かされて入室したブルースの目に映つたのは、神秘的かつ慈愛に溢れた光景。負担がかからぬようにゆつたりとした前合わせのドレスをまとつたその人は、柔らかな光の差す窓辺の安楽椅子に身体を預け、腹部をその腕に抱き込んでいる。

まるで宗教画だ。

ブルースがそう感じるのは、慈しみに満ち満ちた表情のせいだけではない。両手とは別に、背後から伸びて腹部を覆つている純白の翼……母は生粋のオルガイム人なのだ。この世界、すなわち工リアルスルート唯一の有翼人種である翔国オルガイムの民は、四肢とは別に一对の翼を持つ。寿命こそ

そ他国の人間と大差ないが、卓越した身体能力を有する彼らの成年期は格段に長い。五十五歳になる母の外見は三十後半から四十歳そこそこ、成人して四年経つブルースと姉弟に見られるくらいだ。もちろん生殖期間も長く、此度の懷妊こたびもオルガイム人からすれば驚くことではなかつた。懷妊最高齢は、八十を上まわるという噂である。

そして、普段は自在に体内に収納できる翼を、妊娠中だけは己が意思では納められなくなる。卵を抱く親鳥のごとく、我が身に宿つた命を二対の腕で抱いて一年を過ごすのだ。ひざまずき、祈りを捧げたくなるようなその姿に、ブルースが抱く想いは複雑だった。

自分が母の胎内に宿つていた頃、同じような慈しみの眼差しを向けてくれていただろうか？
心は激しく否を告げる。

平常、自分に向けられる母の視線からは、鋭利な刃物を喉もとに突きつけられているかのような冷たさしか感じない。銀の髪に薄水のような紫色の双眸……人形以上に整つた容姿を持つ母ティールディアには、完璧な美を感じても、そこに自分への愛を見出したことは一度としてなかつた。

自分は彼女の希望……つまり父リユーノの要求に、いまだ応えられたことがない。それゆえ自分は代用品に過ぎないという思いが、いつもつきまとつていた。父の命で入団した騎士団で、母から授かつた身体能力によりいかなる武勲ぶくんを上げても足りない。両親が望むフカツシヤー家の跡取りとして、自分には決定的な不足があることを、ずっと前から自覚していた。

もう何の言葉も必要ない。我が子の誕生を待ち望む母親の顔を見るだけで、答えはわかる……父の大願は間違いなく成就した。

「ブルース・フカツシャーと名乗るのは、そして男を名乗るのは今日までのこと、貴方の存在価値はなくなりました……フカツシャー家当主はこの子、バーネスです」

フワリと微笑んだ後に顔を上げ、こちらに向けて平素と変わらぬ視線とともに告げられた言葉は、決して抗えない宣告。拒絶することはできないのだと、骨身に沁みてわかつている。今はただ、足もとが崩れるような虚脱感とともに次の言葉を待つ。

用済みとなつた我が身に課せられる次なる役割と、新しき名は……

「ダグリード侯爵家現当主で、王立騎士団が雷龍隊隊長フォーサイス・ダグリードは……」

この場には無関係な、しかし聞き慣れた人物の名が耳を突き、呼吸が詰まる。助走を始めた鼓動は、瞬く間に両掌に冷たい汗をかかせた……次句に、身も凍るような恐怖を覚える。

「爵位こそフカツシャーに劣りますが、『アイリスの剣』という字を持ち、陛下の信頼も大変厚く……釣り合いは十分にとれています」

釣り合いとは一体何のことか……古くから続く軍人家系であるフカツシャー公爵家とダグリード侯爵家は戦地での譽れを二分する由緒正しき貴族。たとえ因縁がなくとも、拮抗する勢力はそれだけで確執を生む。現に父リユーノがダグリード家の鬼神のごとき剣の才を持った現当主を苦々しく思っていることを自分は知っている。それゆえに、不出来な己に苛立つていることも……

「貴方には、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ花嫁として嫁いでもらいます……ブルーデンス・フカツシャーとして」

さらに続けられた言葉は、死刑宣告よりも衝撃的だった。

「ふざけるのも大概にしろつ……今さら女に戻れるか！」

考える暇もなく叫ぶ。恐怖を凌駕し、心に広がつたのは御し得ないほどの強い怒りだつた。

「一年前、母上が望んだのは息子としての私です！あの頃は貴女の鞭が恐ろしくて従つたが、今度ばかりは無理だ！私は雷龍隊副隊長ブルース・フカツシャー！この五年間もつとも彼の近くにいた人間！どれだけ鞭打たれても、できるはずがない！」

自分の初めての激昂にも、母が向けるガラス球のような寒々しい双眸は揺るがない。まるで母と自分の間には分厚い氷の壁があり、この声が届いていないかのようだ。

それでも、彼を巻き込むわけにはいかないのだ……初めてこの生に意味を見出してくれたのは、フカツシャー家にとつては仇敵であるフォーサイスその人なのだから。

「サクリファの妙薬というものを知っていますか？」

美しく紅の塗られた唇が紡いだ次句の意味を、ブルースはすぐに理解できなかつた……いかに残酷な言葉をぶつけられても耐え抜こうと、肩に込めた力がその出口を失う。

「先頃、高名な魔術師であられる魔法大国ガルシユの宰相ユーシス・バン・エセルヴァート閣下が、その開発に成功されたそうです。死者さえ蘇るよみがえ。そういうわれる奇跡の薬なのだそうですよ。ただ、魔導石サクリファを碎いて作るその薬は、フカツシャー家の財力をもつてしても手に入れることが難しい大変に高価なもの……命の値段、ということなのでしょうね」

引き上げられた口角……その言葉を正しく解したとき、胸に渦巻く怒りは激しい恐怖へと変わった。

「交換条件、ということですか……母上」

「お母様とお呼びなさい、この十一年間で貴女は随分と粗野で浅慮になりました。これから半年間で、貴女をどこに出しても恥ずかしくない貴婦人に磨き直します……そうでなくてはお父様の顔に泥を塗ることになります」

予定ではなく決定事項として舌に乗せた母の目は、すでに自身の腹部に落ちていた。さきほどまでの鋭利な光は瞬く間に聖母のそれへと切り替わる。

絶望が胸を満たしていた。

彼女は幼い自分を従わせるために鞭むちを使つた。

そして今、悪戯いたずらに身体を傷つけるだけのそれはもう必要ない。どんな体罰も、突きつけられた言葉に及ぶものではない。

母ティルディアは、何を使えば自分が屈服するか……今も昔も当人以上に知り尽くしているのだ。
「返事はどうしました、ブルーデンス」

立ちすくむ彼女に、追い討ちをかけるように行儀を促す。

「……はい、お母様」

強いられた服従の言葉を舌に乗せたとき……この五年、危うい平安をもたらしていた偽りの世界は、再びその色を失つた。

第一章 存在価値

1

一体、この十一年間は何だったのか……ブルースは兵舎の執務室で荷物をまとめながら、ため息を禁じ得なかつた。

ブルース・フカツシャーは、十三のときアイリス国王立騎士団に人団。勤勉に鍛練、任務をこなして順調に経験を積み、遂には騎士団内でも誉れ高い精銳部隊・雷龍隊の副隊長を任された。当主としての務めは……他の軍人家系の基準であれば、十分過ぎるほど果たしたといつても過言ではない。それでも、自分の存在価値なぞ生まれたばかりの弟の前には、塵芥に等しいものだつたらしい。ずっと自分の意思を抑え込み、フカツシャー家のためにすべてを諦めてきたブルースだつたが、かつては夢見た重責からの解放も、今は簡単に喜ぶことができない。昔の生活に戻ることなど、今の自分にはできないのだ……あるのは、理不尽な要求を受け入れたことによる屈辱と、この先に待ち受ける運命を拒絶できなかつた己の不甲斐なさへの苛立ただけだつた。

頭が痛い……無意識に右のこめかみを押さえると、その指先に触れるのは五年前の傷跡。半年前

のあの日から考え込むとつい触れてしまい、今ではなかば癖になつていた。腰まである漆黒の髪。その前髪の生え際に位置する裂傷が消えることは生涯ないだろうが、決して目立つものではない。騎士として生きる決意を固めていたブルースにとつて、些細な顔の傷などどうでもよかつた。名譽の負傷であつたそれは、両親から咎めされることもなく、雷龍隊隊長フォーサイス・ダグリードの信頼を得ることもでき、そのために今の立場を得られたといつても過言ではない。

しかし、それもまたこれから自分の歩む道には大きな汚点となるのだ。早速、母には浅慮だつたと戒められた……当時は、父とともに功績を褒め称えていたというのだ。

過去の幻影達に名を呼ばれたような気がしてうしろを振り返ると、その黒い瞳に映つたのは、姿見に映る己の姿。精銳揃いの雷龍隊は、厳しい鍛錬で作り上げられた鋼のような肉体を持つ者ばかり。その中に混じつていると、どうしても貧相に見えてしまう。とりわけ背が低いわけではない、筋肉がついていないわけでもない……ただ、根本的な身体の構造が違うのだ。

ブルースには、アイリスとオルガイムの血が流れている。薄いように見えるこの身体だが、その八割超は高密度の筋肉でできているのだ。最古の創造神が組み込んだ特性……両腕とは別に、母と同じように自分の背には翼があつた。生まれ落ちたそのときから空を飛ぶことを義務づけられた身体は、無駄を許さない。自分の身体に備わつた筋肉は、空を飛ぶためのもの……重く、これ見よがしな猛々しさはない。その翼さえ、この国に生きる限り、人目に晒すこととなかつた。

だから貧相に見えてしまうのだ。線の細い顔も、それに拍車をかけている……そう周囲に大げさに嘆いてみせた。隙を見せればすべてを失う。精一杯の虚勢と偽りを、漆黒の軍服の下に隠してこ

これまで生きてきた。

騎士には不釣り合いなその女のような顔は、日々の厳しい鍛錬のためだけではなく疲弊し切つていた。顔色は蒼褪め、目の下にはわずかにクマができる。自信のない、濁んだ黒い双眸、艶をなくした黒い髪……余すところなく張り巡らされた偽りが、剥がれ落ちるときは近い。

これから、その貧相な身体を最大限に利用しなければならないのだ。この十一年で培った剣の腕、ばねのようなしなやかな身のこなし、ようやく手にした男として生きる自分の矜持。そんな生き方を自分に強いたはずの両親は、強要したすべてを今になつて何の価値もないものと切つて捨てた。

「ブルース、入るぞ」

唇を噛みしめて苛立ちを抑えていたところ、そんな声とともに返事も待たずに執務室の扉が開かれる。

「……隊長」

一瞬前まで回想の中にいた人物の登場に、ブルースは即座に姿勢を正す。

フォーサイス・ダグリード……代々当主には「デイリスの剣」の称号が与えられるダグリード家。その現当主にして、雷龍隊隊長。由緒正しいその家系は軍人を数多く輩出し、その遠縁にはこの世界、エリアスルートを救つた救世主であるオルガイム王妃がいる。二つの名のとおり類稀なる剣の才を持ち、二十三という若さで隊長に抜擢されていた。雷龍隊が精銳と呼ばれるようになったのは、彼

の功績が大きい。身分に関係なく腕の立つ者を取り立てたのは、どうしても貴族色の濃くなる騎士団では画期的だった。当然、一癖も二癖もある者達が集まつたが、フォーサイスは貴族にも庶民にも、その待遇に分け隔てをしなかつた。反感を持つ者、訓練についていけない者は脱落したが、入隊試験はフォーサイスが直々に当たるため、入隊後に除隊する者は少なかつたのだ。

厳しくも正当な評価を下し、それでいて任務さえ着実にこなしていれば、軍紀に触れない限り多少の素行の悪さは咎めない柔軟な彼を隊員達は総じて慕い、忠誠を誓っている。

ブルースも、騎士としても人間としても優れたフォーサイスを尊敬していた。また彼も副官の自分に信頼を置いてくれていた。それなのに、まさかみずから除隊願いを出すことになるとは、これ以上の皮肉はない。

「……決心は変わらないか」

「ええ、除隊届は確かに受け取つて頂いたはずです」

苦々しい表情を隠そうとしない直属の上司を見て、ブルースの顔にも自嘲の笑みが浮かぶ。

「だが、お前の意思だとは到底思えない」

「私の意思など、最初からどこにも存在していないのですよ。家長の命令は絶対……逆らうことはできない。貴族の家に生まれれば、致し方ないことです」

「内情は聞かん。俺が知りたいのは、なぜ騎士団まで辞める必要があるのかだ」

責めるような強い双眸から瞳を閉じて逃れ、ブルースは嘆息する。上司の前で副官としてはあるまじき態度だが、湧き上がる疲労感からそれを禁じ得なかつた。

「当主の座を降りて、そのままというわけにはいきません。別の役割が発生したのですよ、騎士との両立は不可能なのです」

「その役割は、俺にも言えないと？」

「申し訳ありません、フカツシャー家の問題なので」

「実は、貴方にも深く関係することだ……そう言つてしまえれば、楽になれるだろうか。

「……俺に何かでできることは？」

「これ以上、引き留めないで下されば、それだけで」

「まっすぐに見返して言うと、フォーサイスもため息をつく。

「決定を覆すことのない頑固さは健在だな……俺一人で、あの癖の多い荒くれ者どもを束ねるといふのか」

「ライサチエックへの引き継ぎは済ませています。あれでなかなか有能ですから、慣れれば私なんかより、ずっとうまく捌けるようになりますよ」

「お前に敵う者はいない……しかし、リューノ公の考えはわからん。生まれたばかりの赤子に何ができる、お前に何の不足がある」

「過分な評価をありがとうございます。私が期待に応えられたことは、一度もありませんでした……所詮、父にとつては不測の事態に備えた代用品でしかなかつたのです」

笑みを浮かべた口もとが、不自然な形に歪むのはどうしようもなかつた。

「今までお引き立て頂き、隊長には本当に感謝しています。貴方のお陰で今の私はある」

「ずっと助けられてきたのはこちらの方だ、ファティマーの件も」

「いいえ、ファティマ様にもよろしくお伝え下さい」

前髪で隠れた傷の上に留まる彼の視線に頭を振りながら、微笑み直す。

「あれはお前に懷いていたからな……除隊を許したことでの、親の仇^{かたき}のように責められたぞ」

「申し訳ありません」

彼の妹ファティマの勝気な性格を思い出し、苦笑を洩らした。

「お前のせいじゃない、それがまた悔しいがな。落ち着いたら手紙でも書いてやつてくれ、友人として」

「ええ、喜んで」

兄とはまた異なる美貌の彼女とは、とある事件を通して出逢った。確かに気は強いが、決してわがままや気位が高いというのではない。意思が強く、女性であることが惜しいほどに聰明でもある。それまで兄以外の異性を歯^こ牙にもかけなかつたファティマとブルースの関係を邪推する者もいたが、ブルースの予想に反して輿^ご入れ前の貴族の令嬢にあるまじき噂を、当主であるフォーサイスも本人も特段問題にしなかつた。一時は夫の座を望む者から嫌がらせを受けもしたが、それも察知した上司の手によって秘密裏に排除されていたことを後にファティマから知らされた。

ファティマがブルースに抱いているのは純粹な親愛の情で、恋愛感情ではない。六歳下だが実に聰明な彼女は、ブルースにとつても大切な友人である。二人の間には何の下心も存在せず、その関係は何があつても変わらない……それが兄妹にとつて重要な信頼になり得たのだろう。

そんな唯一無二の友人に、今後、自分が会うことはもう不可能に近い。そのことがブルースを、寄る辺をなくした子供のような気持ちにさせた。

「本当に大丈夫か？」

「……ええ、何でもありません」

「覆らない運命を思ううち、無意識に眉根に力が入つていていたのだろう……思案顔で尋ねてくるフオ

ーサイスに、ブルースは慌てて笑顔を作り直す。弱い自分を叱咤した。こんなことではこの先待ち受ける困難なぞ、到底乗り越えられない。

「この五年間、お前には随分助けられた。感謝する」

「私も、ダグリード隊長の下で働けて光栄でした……楽しい日々でした」

差し出された手をブルースが握ると、強過ぎるほどに握り返された……未練を払拭し切れないと

いう心情が伝わり、不覚にも目頭が熱くなる。

両親からはとうとう得られなかつたもの……誰かに必要とされることは、これほどまでに甘美だ。

その手を離すしかない自分が歯がゆい。自分が選んだ道は、明らかに破滅へと続いているのに。

「何か問題が起れば、いつでも来い。俺もダグリード家も助力は惜しまない」

「……ありがとうございます」

何かを察したような言葉に、繋がれた手を解いたブルースは、光る目もとを隠すように深々と頭を下げる。フォーサイスが退室するまで、その顔は上げられなかつた。

「あんたつて奴あ、ホントにどうしようもねえな」

声に反応して顔を上げると、半開きになつた扉に寄りかかるようにして立つ大柄の男が目に入つた……ひどく呆れた顔をしている。

「……ライサチエック、最後に何か確認したことでも？」

主の許しも得ずズカズカと室内に入ってきた後任の彼に、そう尋ねる。

「ねえよ。隊長も鬼だが、あんたのしぐさも相当なんだつた。大概の非常事態なら、寝ながらでも対処できらあ」

庶民の出の彼は口も素行も褒められたものではないが、任務は確実にこなす、実に有能な隊員である。ブルースが去ることになった今、隊長への忠誠心は隊内でもつとも強いだろう。

「だから、副隊長に推したんだ。後のことば任せた」

「迷惑な話だねえ……あんたが完璧にやり過ぎたお陰で、こつちは雑用の山だ。副隊長なんざ他の部隊じや、お飾りだつてのによ」

「そう思うなら、今後は隊員内で分担してやるようにするんだな。後は任せたといつただろう、やり方は好きに変えて構わない……ダグリード隊長も口出しはしないと言つていい」

口では不平を言いながらも、みずから役割を放り出したりしない責任感の強さと頭の回転の速さを知っているブルースは、ライサチエックへの引き継ぎに容赦をしなかつた。

「いいよ、あんたのやり方だから、つきはぎだらけの部隊もまとまつてたんだ……寂しくなつちま

うなあ

「……ああ」

ブルースは実感を込めて頷く。当主としての責務や騎士としての譽れをもとめるばかりで何も与えてくれなかつたフカツシャーの広大な邸宅よりも、この土と汗に塗れた男臭い兵舎の方が、自分にとつては安らげる家だつた。

フォーサイズをはじめとして雷龍隊の隊員達は、フカツシャーの名ではなく、ブルース個人を認めてくれる。

厳しい鍛錬や難易度の高い任務をともにしてきた部隊内には、固い結束が生まれていた。そんな彼らのもとを偽つた自分のまま去らなければならないことが、ブルースには苦痛で堪らなかつた。隊長が引き留められなかつたんだ、俺らがどうこうできつとは思つてねえよ……だが、どんなに離れても俺らは仲間だ。そんだけは忘れんなよ

まるで子供か小動物かのようにガシガシと頭を搔きまわされたが、その気持ちが温かくて嬉しい。「ほれ、俺らからの餌別だ」

そう言つて、彼はブルースに真新しい本を差し出す。黒革の背表紙で、しおり紐は花を模つた美しい飾り結びになつていて。

「……っ、……これはサスキア王妃の」

「外地任務のついでに寄つたオルガイムで、チエイスが見つけてきたんだよ」

確かに彼は外地任務に就いて昨日戻つてきていたが、提出された報告書記載の任務地は翔国オル

ガイムからは正反対の場所だつたはず……騎士団への入団理由を救世主への憧れからだと公言していたブルースは、サスキア王妃信仰者だ。軍神に恋しているだとか、他の隊員達に散々揶揄されいた。

「ありがとう、これは……本当に嬉しい」

苦笑して引きしめ直したはずの涙腺が再び緩み始める。我らアイリスの血が半分流れるという翔国オルガイムのサスキア王妃は、ブルースがもつとも尊敬し、目標とする人物だつた。かつて対面した幼いブルースを一瞬にして魅了した、戦の神と同名のそれに相応しい救世主たる彼の人……この本は彼女が筆をとつた剣術指南書なのだ。己など及びもつかない剣の才を持つサスキアみずから著したこの書物は、ずっとブルースが欲していたもの。オルガイム国内のみで発行ということで、訪問する機会に恵まれなかつた自分は、その入手をなかば諦めていた。

「泣くなつ……綺麗な顔が台無しだぜ」

そう言つて、再びブルースの頭を搔き混ぜてくるライサチエックの声も、感極まつたように上擦つてゐる。

自分は本当によい仲間に恵まれた、騎士団に入らなければ、手に入れられなかつた……だからこそ、ブルース・フカツシャーのまま隊を去らねばならないことが辛い。

明日になれば、ブルース・フカツシャーという人間は、エリアスルートのどこにも存在しなくななるのだから。

十一年振りに袖を通したドレスは、登城時に着用する騎士の正装よりも遥かに窮屈だつた。うしろから侍女にコルセットの紐を容赦なくしめ上げられ、骨が悲鳴を上げる。圧力から歪みそくになる表情を何とか抑えた……化粧が崩れ、侍女の三刻もの努力を水泡に帰すことだけは避けたい。これ以上分厚く白い粉を塗り込められれば、きっと自分は皮膚呼吸ができなくなり窒息してしまう。

目の前の姿見に映るのは、公爵家の令嬢ブルーデンス・フカツシャー。偽りの色は剥がされ、金属のように鋭く輝く銀の頭髪と双眸……こちらこそ生来の姿なのに、自分の目にはひどくよそよそしく映つた。

もう、アイリス王立騎士団が雷龍隊副隊長ブルース・フカツシャーは存在しない。

これから自分は、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ嫁ぐ。妊娠が発覚し、宿る命が男児であると判明した半年前、母ティルディアが決めた縁組。ようやく男として生きることへの違和感が薄れてきた矢先、あまりに理不尽な話に眩暈がしつづけ、激しい怒りに駆られた。

ふざけるのも大概にしろつ……今さら、女に戻れるものか！

激昂する自分を、母は表情を変えずに切つて捨てた。

フカツシャー家にとつて“ブルース”の存在価値がなくなつた今、“ブルーデンス”として生きる他に道はない、と……

次いで持ち出された条件に、拒絶の言葉を失つた。

自分の母は、世間一般の母親とはまつたく違つた価値觀を持つ人だつた。どこまでも夫に従順で、家長の命に私情を決して挟まない……文化の異なる他国の人だからと納得するには、あまりにも子に対する情愛が欠落していた。

それでも唯々諾々と従つていればいつかは、とその愛をわずかながら期待していた想いは、今回のことでの完全に碎け散つた。

「黙つていれば、見られるようになりましたね……こめかみの傷もうまく隠せています」

生まれたばかりの弟を抱くその人は、ブルーデンスの仕上がりに満足げに微笑む。母は、五十五歳という実年齢が信じ難いほどに瑞々しく美しい。長年にわたる両親の執念が実を結び、ティルディアがふた月ほど前に産み落とした同胞……その腕の中ですやすと眠る弟バーネスは、どこまでも無垢な顔をしている。

「抱かせて頂いてもよろしいですか、母上」

ブルースの存在価値を打ち碎いた張本人ではあつたが、血を分けた実の弟を憎む術を自分は知ら

ない。

「いいえ、ドレスに髪が寄ります。それに、お母様とお呼びなさい。貴女の話し方は硬く、女らしさに欠けます」

「……以後、気をつけます。お母様」

ドレスの裾をそつと摘み、最大限の恭しさを持つて頭を垂れる。ブルースとして生きた十一年より、ブルーデンスとして生きてきた時間の方がまだ二年長い……ここ半年の訓練の賜物でもあるが、物心つく前から徹底的に叩き込まれていた貴族の令嬢としての立ち居振る舞いは骨身に染み込み、完全に忘れ去ることはなかつたのだ。

「所作は及第点でしょう」

その様子にティルディアも頷く。

「……最後に、お兄様にお会いしたいのですが」

譲れない想いを双眸に宿して、訴える。

「いいでしよう。まだ少しだけ時間があります、手短に」

「ありがとうございます」

再び一礼し、ブルーデンスは足早に部屋を出た。

* * *

病に倒れた異母兄ストレイスは、離れの館でひつそりと療養している。先妻の忘れ形見である柔らかな物腰の彼は、愛情溢れるとても優しい人だった。生母の性質を受け継いだらしく、物静かで穏やかな性格と華奢な体躯は騎士に向かなかつたが、それでも父の命でその期待に応えようと常に無理をしていた。彼の身体に病魔が巣食つたのは、その優しさゆえだと思う。

「ブルーデンス……久しぶりだね、その姿」

今日は多少加減がよいようで、日の差し込む窓辺で安楽椅子に腰かけている。向けられた微笑みは、柔らかな日の光に溶けてしまいそうに儂げだ。

「お兄様……今日は、顔色がよろしいですね」

それでも、ブルーデンスはそう言つて笑み返す。

「いつもいつも寝てばかりはいられないだろう。とくに、今日のような日は」

来てくれてよかつた、といつたストレイスの潤りのない眼は、自分の心の底まで見透かしているようだ。

「……今までお世話になりました」

「ずっと助けられていたのは、私の方だよ……お前がいなければ、この年まで生きられなかつた」
続けられた言葉に、ブルーデンスの表情がわずかに強張る。兄は知っているのだろうか……母と自分が交わした密約を。

「私がこんな身体のせいで、お前には無理を強いる……兄失格だ。ブルーデンス、お前はもつとわがままを言いなさい。堪えられないなら、そう言つてしまいなさい」

「いいえ、いいえ……お兄様は私を愛して下さいました。それだけで、私には十分です」

殺伐としたフカツシャーの家で自分を心から愛してくれたのは、半分しか血の繋がらない兄だけだった。彼のためなら何を犠牲にしても構わなかつた、だから今の自分がいる。

「私はフォーサイズ・ダグリードに嫁ぎます。の方を、お慕いしているのです」

紛れもない真実の気持ちだ。

「それは知つてゐる、けれど……」

「いいのです、これで。私の幸せを、祈つては頂けませんか?」

そう言つて、二の句を封じる。

「誰よりも、何があつても祈つてゐるよ。ブルーデンス」

「お兄様も、ご自愛を……」

「ドレスに皺^{しわ}が寄る、義母^{しゆふ}上に怒られるよ」

兄の身体を抱きしめようと伸ばした腕を押し留め、ストレイスは代わりにブルーデンスの手をとる。

「綺麗だよ、お前の微笑みを受ける者こそ本当の幸せ者だ」

「……ありがとうございます」

澄んだ漆黒の双眸^{そうちゅう}に、ブルーデンスは兄の幸を祈つて微笑んだ。

* * *

五年前に一度だけ訪れたことのあるダグリード邸は、蔓薔薇^{つるばら}に覆われた赤煉瓦^{あかれんが}の壁で囲まれていた。当時競うよう咲き誇っていた深い紫の蔓薔薇^{つるばら}はダグリード家の紋章でもあつたが、夏の今は青々とした葉のみが茂つていた。

「貴女の方がダグリード家の方々とは親しいでしよう……だからこそ、気を抜いてはいけませんよ」馬車の窓から徐々に近づく屋敷を確認していたブルーデンスの横顔に、ティルデイアが念を押す。

「はい、心得ております」

化粧^{ほざく}を施し、ドレスという名の鎧^{よろい}をまとい……外見こそ完璧に取り繕つた自分。ブルースの面影^{めいえい}は脣に引かれた深紅^{いろ}で一分の隙もなく覆い隠した。後は自分の心に懸かつてゐる。

「では、行きますよ」

細かな装飾が施された鍊鉄^{れんてつ}の門扉の前で、静かに停止した馬車の扉が開く。もう逃れることはできな^いい……わずかに身じろぐ度に内臓をしめつけるコルセットの圧力だけでなく、ブルーデンスの心は否応なく引きしまる。

「ようこそ、ティルデイア！……貴女がブルーデンスね」

馬車のステップを降りた先、迎えてくれた前侯爵の夫人は記憶の中と同じ穏やかな笑みを向けてくれた。若々しい彼女は、娘のファティマとよく似た華やかな美貌の持ち主だ。

「はい、お初にお目にかかります。お出迎え頂きありがとうございます、エルロージュ様」
それ以上はないという慎重さでドレスを汚さぬよう気を配りながら、広がるスカートの裾を摘み、
極限まで腰を落として深く頭を垂れる。面識のあるエルロージュには、一切気を抜くわけにはいか
なかつた。

「遠いところを^{はるばる}、さぞ疲れたでしょ？」

「いいえ、皆様にお逢いすることが楽しみで……快適な旅でしたわ」

ゆつくりと姿勢を戻しながら、吐き気をもよおすような緊張を押し殺して微笑む。

「私も楽しみだつたわ。さあ、入つて……」

「エルロージュ、私はここで」

二人のやりとりを満足そうな笑みを浮かべて見つめていたティルディアが、エルロージュの申し出を制してそう口を開く。

「リユーノが陛下から急なお召しを受けて、……屋敷を空にはできませんの。ご存じのように、バ

ーネスもまだ幼いでしょう？」

用意していた言葉を、愁いを帯びた表情とともに紡ぐ……その演技力には、いつ見ても感嘆の念を禁じ得ない。

「……そうだつたの、ごめんなさいね。ブルーデンスは責任を持つてお預かりするわ」

「いいえ、私こそごめんなさい。それでは、半年後に」

「ええ、楽しみにしているわ」

まるで古くからの親しい友人同士のように、エルロージュと手を握り合つて笑みを交わし、ティルディアは完璧な暇の礼を見せて馬車に戻る。扉が閉まるごとに、流れるように馬車はその場を後にした。

「本当に、礼儀正しくて素晴らしい方ね……貴女のお義母様は」

「……大変、よくして頂いております」

ティルディアの祖国の妹が半年前に病死し、娘が一人残された。一年前に父親も亡くしていたその娘に、手を差し伸べたのがティルディアだった。養女として迎え入れられた彼女の名前はブルーデンス……この自分ということになつていて。

「中に入りましたよ、ごめんなさいね……こんな大切な日に、あの子つたらまだ帰つてないのよ」

今日は騎士団本部での定例報告会で、フォーサイスはそれに参加しているのだ。いつもは自分も同行していたが、今日はライサチエックが同行しているだろう……このところ大きな問題は起こつていらない、いくら長引いても今時分には終了している。他の部隊との間でライサチエックが騒動を起こしたか、フォーサイス自身が意図的に遅らせているのか。

「ブルーデンス」とフォーサイスの間に面識はない。彼は妻となる自分の顔さえ知らないのだ。今回の縁組はフォーサイスにとって、当主として避けられない責務……彼が妻に望むことは、自分への従属であつて愛ではない。雷龍隊内で、同性の仲間内でこそ気さくで誠実なフォーサイスだったが、女性に対してはなれば蔑視に近い感情を持っていた。貴族の令嬢達にとって、漆黒の誘惑と称される整った容姿と、アイリスの剣の称号、類稀なる剣の才と三拍子揃つた完璧な夫候補であるフォーサイス……関心を引くための行き過ぎた駄け引きや、女の汚い部分を散々見てきた彼の女嫌いはも

う末期症状だった。もつとも近くで見ていたブルーデンスは、そんな彼の気持ちが理解でき、同情もしていたのだが。

「お気遣いありがとうございます、大丈夫です」

できることなら、今日は帰つて来て欲しくない……ブルーデンスは^{くじ}掛けそななる気持ちを隠して、エルロージュに微笑んだ。

「お母様、その方がお兄様の……？」

玄関広間に足を踏み入れたところで、凛とした声とともに少女が奥の階段から早足で降りてくる。波打つ黒髪は、無造作に垂らされているだけなのに輝くばかりに美しく、夜を閉じ込めたような瞳も星々をちりばめたようにまばゆく吸い込まれそうだ……唯一無二の友情を誓つた彼女。その再会が、懐かしさよりも緊張を孕んでいるのが悲しい。

「ファティマ姫……で、いらっしゃいますね？ 初めまして、ブルーデンスと申します」

同性として逢う今、ブルーデンスは自然な微笑みを浮かべることがひどく難しかつた。

「ファティマで結構ですわ……似てらっしゃる、ブルース様に」

ため息のように吐かれた言葉に、胸は早鐘を打つ。

「義兄に……会つたことはありませんが、親しくされていたそうですね」

「ええ、突然騎士団を辞められて……引き留めなかつたお兄様には失望しましたわ。あれだけお世

話になつた方ですのに」

「ファティマ、来られたばかりのブルーデンスの前でそのようなことを言つてはいけません」

兄の非難を始めた彼女を、エルロージュは窘めるよう言う。

「そうでしたわ……お義姉様、兄は仕事人間で面白味に欠けますし、冷たく感じることもあるかも知れませんが、本当は優しい人なのです」

「……ファティマつ、余計印象が悪いではないの」

さらに言葉を続けたファティマに、夫人は嘆息をこぼした。

「当主様は、素晴らしい方だと聞き及んでおります。私の方こそ、きちんとお仕えできるかどうか……」

微笑ましいやりとりを重ねる母娘に、ブルーデンスの緊張もやや解れる。

「きっと大丈夫ですわ、お義姉様はブルース様によく似てらっしゃいますもの」

「そう、でしようか……？」

似ている、似ていると連呼するファティマに、ブルーデンスは内心堪^{たま}つたものではなかつた……

黒と銀の色素の違いもさることながら、完璧主義者である母に造り上げられたこの姿。背格好こそ同じかもしれないが、顔立ちはそう似ては見えないはずだ。

「お姿ではなくて、雰囲気が……剣を扱う方だけれど、普段はとても穏やかで優しい心根を持たれた方ですもの」

「ファティマは、ブルース様が本当に大好きだったのよ。それが二人とも恋心でなかつたのが、私

には残念でならなかつたのだけれど

エルロージュの言葉に、ブルーデンスはわずかに目を見開いてしまう。一度しか面識のない夫人から、そのように思われていたとは意外だつた。

「お会いしたのは一度だけだつたけれど、本当に紳士な方なのよ。今回の縁組でティルディアに会つて、それも納得したわ……素敵なお母様の教育の賜物たまものだつたのね」

「だから、ブルース様の義妹でいらっしゃる貴女がお兄様の奥様になつて頂けると聞いて、嬉しかつたのです……きっと、貴女なら」

前侯爵夫人の言葉を受けたファティマの言葉なれば、玄関の扉が大きく開け放たれる。

「……ただいま戻りました」

不機嫌を隠さない声、ブルーデンスの心臓が大きく跳ねる。

「お兄様、遅いですわ！ みなでお迎えするはずでしたのに」

「……職務だ、仕方ないだろう」

「おやめなさい、二人とも……ブルーデンスの前でしよう」

険悪な空気が漂いかけたところを、エルロージュがやや厳しい口調で遮る。ファティマに向かうれていた双眸そっぽうが、そこでようやくブルーデンスに移された。

「ブルーデンスと申します、以後よろしくお願ひ致します」
視線を避けるように、深く首を垂れる。ずっと覚悟を決めてはいたものの、実際に対面すると恐ろしいほどの緊張が全身に走つた。

「……オルガイム人か」

優雅に結い上げられたブルーデンスの髪……右こめかみの傷を隠すために流された一房を、フォーサイズは清水をくうようにその手にとつて無感情に呟いた。

「……つ、……申し訳ありません」

彼の予想外の行動に、ブルーデンスは弾かれたように顔を上げる。初めてかち合つたフォーサイスの視線は、まるで自分を射殺そうとするように鋭く、咄嗟とがやに謝罪が口を突いてしまつた。

そして、幾重にも塗り重ねた真珠粉で隠したはずの傷の存在に気付かれたのではないかと、気が

ではなかつた。

「フォーサイズ！ 何です、その態度はつ……」

とても褒められたものではない息子の対応に、エルロージュの叱責じきせきが飛ぶ。

「私は事実を口にしただけですが」

視線が外され、髪も解放されたものの、ブルーデンスの緊張は頂点に達していた。フォーサイスの一挙手一投足に全神経を集中させる……失敗は許されない。

「ご自分の妻となる方に、あんまりではありませんの！」

「半年後の話だろう、今はまだ自由にさせてもらいたいものだな」

ファティマの非難にも、彼はにべもない。

「……お疲れのところ、お手を煩わせてしました。申し訳ありません」

搖るぎない拒絶の言葉に、ブルーデンスは再度頭を垂れる。嫌悪感を孕んだ視線の鋭利さを、向

けられて初めて本当に理解できた。
最初に言つておこう。この縁組は、契約だ……お前にはダグリード家のうしろ盾を与える。我家の規律さえ破らなければ何をしようと自由だ。望みがあれば母か妹のファティマに言うがいい。常識的な範囲のものならばすべて叶えられるだろう。対価としては、後継ぎを産んでもらう。ただそれだけだ、簡単だろう？」

「フォーサイス！」

「いえ、……誠心誠意、尽くさせて頂きます」

エルロージュの叱責を制し、ブルーデンスは頭を下げたまま言つた。

「必要ない、私は何も望んでいない。だから、お前も私に何も望むな」

了解の言葉さえも一蹴し、フォーサイスはブルーデンスの脇を通り抜けて屋敷の中に入つていった。

「……ひどいわ、あんなこと」

ファティマは、兄の言動が信じられない様子で呟く。

「ごめんなさいっ、ブルーデンス……いつもは、あんなことを言うような子ではないのだけれど」

エルロージュもひどく動搖した様子で、下がられたままのブルーデンスの顔を覗き込むようにした。



て謝罪の言葉を紡ぐ。

「大丈夫です、本当に……」

無理矢理口もとに笑みを浮かべ、ブルーデンスは頭を振る。

きつとこれは、貴方を裏切り、偽ることへの罰……それでも、自分は前に進まなければならない。

3

外出したファティマが戻らない……その一報を聞いたのは、兵舎から戻った宵闇の迫る夕刻のことだった。

屋敷内は不測の事態に騒然としていた。フォーサイスは最悪の結末を想像して狼狽する母を落着させ、捜索のために再び屋敷を出ようと門扉を開いたところ、こちらを目指す一塵の影が目に入る。ファティマを腕に抱いて馬を駆る若い騎士の姿には、この上ない安堵とともに、小さな驚きを感じたものである。ダグリード家と因縁浅からぬフカッシャー公爵家当主は、玉石混淆のアイリス王立騎士団の中、女と見紛うような華奢な体躯、三つ編みに結った腰までの長い髪が随分と不釣合いだった。しかしながら、その思慮深げな双眸の奥には、ぬるま湯に首まで浸かつたような怠惰な貴族には到底手に入れることができない鋭さがあった。どこまで使えるかはわからないまでも、只

者ではないだろう……フォーサイスは、そんな彼の存在を微かに心に留めていたのだ。

「馬上からの無礼をお許しください、自分は王立騎士団角狼隊所属のブルース・フカッシャーと申します。ファティマ姫の馬車が夜盗に襲われているところに行き合わせ、僭越ながら屋敷までの護衛を務めさせて頂きました」

淀みのない口上を述べ、ひらりとその場に降り立つた男ブルースは、蒼褪めて小刻みに震えるファティマの身体を馬上より恭しい所作で抱き下ろす。御者や従者の姿はなく、血に染まつた布を額に巻いた彼の駆る馬は、馬車に繋いであつたうちの一頭であるらしかつた。手傷を負い、白い馬体は赤黒く汚れている……それらの示し出す真実に、心がひやりとした。

「……いやっ！」

よほど怖い思いをしたのだろう……妹はブルースの首にその腕を巻きつけ、離れようとはしない。人見知りの激しいファティマが、家族以外にここまで懐くのは稀だつた。

「ファティマ様……もう大丈夫ですよ、お兄様もいらつしやいます」

剣を振るう者としては随分と繊細な指が、ファティマの髪を梳く。浮かべる微笑みも紡ぐ言葉も、ついさきほどまで戦いに身を投じていた者とは思えないような穏やかさを湛えていた……手傷を負つて少なからず興奮しているだろうに、腕に抱くその存在を安心させようという細やかな配慮に、その年若さでどう感嘆したものだつた。

* * *

怯えるファティマを母に任せ、その後すぐに彼を伴つて現場を検証した。致命傷ではないものの、逃走できない程度の負傷を負わされた夜盗達はその場に拘束されており、一味全員を捕えることができた。その無駄のない剣筋は傷つけるためではなく、誰かを守るためのものだ。妹の命を救つたことにに対する感謝は当然だったが、それ以上にその腕が欲しいと思った……探していた副官にこれほど相応しい人物はない、彼なら安心して隊と、この背を預けられる。

実際、いけ好かない角狼隊長に借りを作つてまで引き抜いたブルースは、想像以上に有能だつた。生粋の貴族の出でありながら実に柔軟な思考の彼は、腕はあるが個性の強い隊員達をうまくまとめて上げた。自分のように強さですべてを掌握するのとは違い、それこそ仁徳なのだろう。綺麗な餉と鞭の役割分担が成立していた。

五年後、精銳と呼ばれるまでに成長した雷龍隊……それを見届けたといわんばかりに、ブルースから突きつけられた除隊届。

フカツシャー家はダグリード家に勝るとも劣らない名家、前の戦乱での負傷により将軍職を辞した前当主リユーノは、今なお軍部に強い影響力を持つ。家名に対する強過ぎるほどの誇り、厳格にして旧体制の塊のような男だったと記憶している……その凝り固まつた父の教育下で、あのようにしなやかに育つたのはまさに奇跡、現当主ブルースは実に有能で、立派にその責務を果たしていた。

それなのに、生まれたばかりの弟にその座を奪われ、そのために騎士団さえ追われるという。リューノの目には、彼が無力な赤子にさえ劣つて見えたのか……そんな馬鹿な話はない。ただ、ブルースの疲弊し切つた姿を見れば、抗つてなお屈服せざるを得なかつたのだということが知れた。

引き留めるな、理由も聞くなというブルース……穏やかな性格だが、その意志は誰よりも固い。頑なな彼の態度に、何もできない、してやれない自分に、腹が立つて仕方がなかつた。

それと同時に、フカツシャー家がブルースを切り捨てた理由に思い当たつた。半年前、突如として持ち上がつたダグリード家とフカツシャー家の縁組……この縁組の背後には、リユーノの影がある。彼が騎士団内で唯一干渉できない雷龍隊が、リユーノの息のかかった部隊と何度も衝突することがあつた。今となつては偶然か必然かも計れないが、副隊長を務めることになつたブルースは、きっと隊の実権を自分から奪う命を受けていたはずだ。

副官として影日向なく仕えてくれたブルースの忠誠心に裏表は存在しなかつた。その忠誠心ゆえにリユーノに見限られたのだろう……そして、今度は養女を使つて自分をとり込もうとしているのではないか？

アイリスの社交界でもそろそろ出逢えないほど美しい所作で、フォーサイスに腰を折つたフカツシャー家の令嬢ブルーデンス。

彼女は銀の髪と瞳を持っていた……ブルースの母テイルディアは生粋のオルガイム人であり、遠

縁ながら王家の血を引いている。戦乱より前にフカツシャー家へと嫁いできた彼女には、祖国に妹がいた。その妹の娘がブルーデンスなのだ。

両親に先立たれてうしろ盾だてを失つた彼女は、フカツシャー家の傀儡くぐつとして生きる道を選んだ……ブルースとブルーデンス、二人の瞳ひとみは闇とそこに浮かぶ月のように対照的だ。けれど、葛藤を抑え込んでさらに強い意志の光を宿したそれは、驚くほどよく似てもいた。

その境遇が真実であれば、同情もしよう。ブルースがどうとう抗あらがえなかつたりユーノに、血縁関係もなく、何の力も持たない彼女が逆らえるはずがない。己の意思か、強制か……彼女にはフカツシャー家の陰謀が絡みついていて、切り離すことは不可能だ。都合のよすぎるその出自には、甚はなほだ疑問が残る。

仮にこの縁組を断つたとしても、リユーノは諦めずに他の策を弄するだろう……フカツシャー家の名の下、騎士団全部隊の実権を握るために。

だから、断ることはしなかった。

正式な婚礼の儀はブルーデンスの母親おきらの喪が明ける半年後、現時点では婚約者に過ぎない。今からダグリード家にやつて来たのは、この家のしきたりを少しでも早く覚えるためといつていたが、一刻も早くフォーサイスに取り入り、既成事実の一つでも作ろうとしているのだろう。今まで湯水のごとく押し寄せていた縁談話を切つて捨ててきた自分が、今回に限つて異を唱えなかつたことに、いつまでも独身でいる自分を心配していた母と妹が色めき立つたことも、ことを円滑に進める潤滑油となつた。

何も知らずに喜んでいる二人には少々氣の毒だが、この縁組は決して実現しない。婚礼の儀を迎える前に自分は彼女の化けの皮を剥はがし、フカツシャー家の陰謀を暴く。

貴族の権力争いになぞ、何の興味もない……今は亡き父に与えられた剣に生きる道、信頼できる部隊、それさえ邪魔されなければ他には何も要らない。だからこそ、それを脅おびやかす者は許さない。汚い手を使って……実子さえ駒こまとして使い、思い通りに動かなければ切つて捨てるそのやり口には不快感を覚えずにはいられない。

俺はただ、雷龍隊らいりゅうたいを守りたいだけ……そして、初めてこの背中を預けられると思えた有能な副官を取り戻したいだけだ。

ダグリード家古参の侍女であるデリスは、この度屋敷に迎えた当主フォーサイスの婚約者に戸惑いを覚えていた。

「おはようございます」

こちらに微笑みを向ける彼女は、使用人が目覚ましの紅茶を持つて行くよりも早く起き、すでに一分の隙もなく身支度を整えていたのだ。何の不自由もないように、と女主人より重々言いつづら

れているのに、朝の挨拶とともに向けられたのは綺麗に化粧を施した顔、その銀髪も昨日と寸分違わぬ美しさで結い上げられている……これでは自分の出番などないではないか。

「どこか……おかしいでしようか？」

右側だけ一房下ろした前髪に触れながら、彼女はデリスの向けた長過ぎる視線を諦るように小首を傾げた。

「申し訳ございません、ブルーデンス様……遅くなりました」

デリスは紅茶の載つたトレーを扉横の机に置き、慌てて膝を折つて無礼を詫びる。

「顔を上げて下さい、悪いのは私の方です。貴女のお仕事を奪つてしまつたのですね」

ブルーデンスは、デリスの前に身を屈める。

「物心ついた頃より、行儀見習いの一環で縁者の屋敷で侍女をしていたので、できることはついしてしまって……以後気をつけますね」

「そんなつ……滅相もございません！」

申し訳なさそうに彼女が告げた言葉に、デリスは一瞬呆気にとられるが、即座に頭を振つた。

昨日のフォーサイスとブルーデンスの冷え切つた対面は、居合わせた侍女達からデリスも聞いている。

まるで予想していたように、彼女は動搖を見せなかつたという。

翔国オルガイムの王家の血を引く銀の髪と瞳を持つた美しき令嬢は、きつと今まで何不自由ない暮らしかけてきたのだろう。それが両親の死によつて失われたものの、豪華な生活を忘れることが

できずに、異国の侯爵家に嫁ぐ道を選んだのだと自分達は勝手な解釈をした……一体、どんな嫌な女なのだろうと。

けれども、目の前に見える手は、纖細だが爪は短く切られており、自分達使用人と同じで実用的に整えられたもの……思慮深いその表情にも、贅沢に溺れる者の面影はまるでなかつた。よくよく考えてみれば、フカツシャー家から持参したドレスや装飾品、その他の荷物の荷解きの手伝いも彼女は辞退していた。これからこの館で過ごすのだ。大部分は別に運ばれてくるのであろうが、それでもかなりの量だつたに違ひない。けれど部屋は綺麗に片付いている……昨日身に着けていたものは違う薄紫色の裾の房飾りが美しいドレスも、昨夜のうちにきちんとクローゼットにかけられたいたようで、皺一つ見当たらなかつた。

使用者の手助けをまったく必要としないブルーデンス。その身のこなしは、アイリスの社交界でも滅多にお目にかかるないような洗練された貴婦人のものである。

「お茶を頂きますね……それから、首飾りを選ぶのを手伝つて頂けますか？」

「かしこまりました」

どういう方なのだろう、この方は……先入観を一瞬にして打ち碎かれたデリスは、新しい主にそれまでは違ひ心から頭を垂れた。

* * *

女だけの朝食を終え、家庭教師に追い立てられるように退室したファティマの不満顔を見送った後、エルロージュとブルーデンスは中庭に出る。

蔓薔薇を紋章とするダグリード家の庭園は、やはり薔薇が多かった。四季咲きのものは、庭師が丹精込めて手入れをしているために夏の今も瑞々しい……春先、屋敷を取り囲む外壁を埋める蔓薔薇が一斉に咲き誇れば、ダグリード家は名実ともに薔薇屋敷となる。目の前に咲いている色とりどりの花弁の多い品種も美しいが、一重咲きの深い紫の蔓薔薇は神秘的でさえあつた。

五年前、宵闇の中、壁前に立っていたフォーサイスに、ブルーデンスは目を奪われた。鋭利に整つた容貌が、気高い剣弁の花に重なつて見えたのだ。

これが、アイリスの剣の名を継ぐ者……自分も彼のようだつたならば、きっと両親は自分を認めてくれた。その愛も得ることができたかも知れない。

せめて、漆黒の髪と瞳だつたなら、少しさはその目を向けてくれただろうか……翔国オルガイムにおいては神聖な色とされているが、黒一色のこの国では、自分はあまりに特異だつた。

「美しいわね」

物思いに耽つていたブルーデンスの隣で、エルロージュがため息を吐く。

「ええ、見事ですね」

二人の目の前にある黄色から薄紅色の変化が美しい花弁の多い薔薇は、とくに華やかだ。

「貴女のことよ……ちょっとした立ち居振る舞いも、とても上品だわ」

八歳の頃から、ブルーデンスは行儀に厳しいことで有名な伯爵家に預けられていた。あまりの辛さに屋敷から逃げ出したこともあつたが、母に連れ戻され、結局十三歳で騎士団に入るまで侍女として働かされた。そこで徹底的に行儀作法を叩き込まれたのだ。

染みついたものは騎士になつてからも抜けず、ふとした瞬間に出てしまっ上品過ぎる所作が、まるで深窓の令嬢のようだとよくからかわれていた。

「駄^{しつけ}が厳しかつたので、所作だけは……当時は辛かつたんですけど、今となつてはよかつたと思つていますわ」

本当にそれだけは幸いだつた、決してこのような状況を望んだわけではないけれど。

「素晴らしいわ……ところで、その髪は自分で？」

「はい、オルガイムの娘は髪結いができるようになつて初めて一人前なのです。婚約が決まつたとき、片方の前髪をうしろと一緒に編み込んで、婚礼の儀を終えたらすべて一つに編み上げるのです」
オルガイムは飾り紐細工が名産品であるだけに、女性の髪の結い方も多種多様で美しい。ブルーデンスはティルディアより、ここ半年の間に徹底的に教え込まれていた。侍女に髪結いを任せれば、こめかみの傷の存在がフォーサイスらの耳に入る可能性が高い。オルガイムの貴族の娘の慣習は、ブルーデンスにとつても都合がよかつた。

「オルガイムの女性は、手先が器用なのね。飾り紐も美しいし」

「ええ、飾り紐は私も好きです……サスキア王妃も愛用されていますし」

エルロージュの言葉に、ブルーデンスも頷く。

「サスキア様はエリアスルートの人々の憧れですものね。貴女はお会いしたことがあつて?」

「幼いときに一度だけ。短い間でしたけど、それでも素晴らしい方であることはよくわかりました」

ブルーデンスは当時を思い出し、柔らかな笑みを浮かべた。

「この国に来られたときに私もお会いしたのだけれど、あんなに美しい方にお会いしたのは初めてだつたわ……黒い髪と瞳以外は、オルガイムの騎士であつたお父様似なのだそうよ。の方の美しさがダグリード家の血によるものでないことが、残念でならないの。もちろんサスキア様と繋がりがあるのは光榮だわ。けれど、あの美しさの数分の一でも自分にあればと、思つてしまふのよ」

フォーサイスの亡父アスターとエルロージュは従兄妹同士であつたらしい。遠縁ながら血縁関係のある彼女は、心からそう思つているようにため息を吐く。

「それだけお美しいのに欲張りでいらつしやいますね、エルロージュ様は。ファティマ様も本当に愛らしいですし、当主様に至つては『漆黒の誘惑』の異名をお持ちとか?」

「あの子には言わないでね、不機嫌になるから。造りはいいのだから、もう少し愛想よくできたらいいのだけれど……今朝も、本当にごめんなさいね」

今朝の朝食の席には、フォーサイスも同席するはずだった。

しかし、早朝訓練があるといって、彼は朝食も取らずに屋敷を出ていつてしまつたのだ。

まだ日の光が差し始めたばかりの時分、馬を驅り門扉から出していく彼の姿をブルーデンスは自室

の窓から見ていた。フォーサイスがあからさまに距離を置こうとしていることに、わずかながら安堵してしまう己の弱さを、ブルーデンスは自嘲する……他人行儀な「私」という呼称を使つたフォーサイスに、あそこまで心を乱されるとは思わなかつた。

今、あの鋭利なまでにまつすぐな視線を受け止める自信がない。

「騎士の務めは大切です、お気になさらないで下さい。私の方が理解しなければならないことですので」

「ありがとう……でも、初対面のあの態度はあまりにも失礼だつたわ。謝罪もしないなんて、許されないことよ」

ブルーデンスは曖昧な笑みを浮かべて、頭を振る。

フォーサイスは自分との婚礼を望んではいない。普通の貴族の令嬢であつたなら、あれだけの言葉を投げつけられて、黙つてはいなかつただろう。

しかし、残念ながらブルーデンスは普通の貴族の令嬢ではない。
雷龍隊の実権を望む父リユーノから、隊長であるフォーサイスを籠絡するように密命を受けた
間諜なのだ。

そんなことをできるはずがない、ブルーデンスにはよくわかつていた。それでも、ここに居続けなければならない理由がある。
己を偽り、彼を欺き……その先で、真実守りたいものは守れているのだろうか?